

地鎮の起源と都の地鎮

現在、建物を新築する際、地神に工事の安全を祈願する地鎮祭じちんさいが広く行われます。文献上、最も古い地鎮祭は、『日本書紀』持統天皇5（691）年に藤原京を鎮め祭らせたとの記事があります。

地鎮祭は、古墳時代にはすでに行われていたことがわかっています。古墳時代中期の精華町森垣外遺跡もりがいとでは、2個体の土師器高杯を埋納する柱穴などが複数確認されています。一般的に古墳時代中期の居住施設は竪穴式住居が主流ですが、森垣外遺跡のように掘立柱建物が居住施設として多用された集落においては、柱穴内の地鎮が先んじて行われました。

日本における初めての本格的な寺院である奈良県明日香村にある飛鳥寺。この寺院は蘇我氏の私寺で、同じ時代、まだ死者を埋葬する古墳が造営されていた時期ですが、この飛鳥寺の塔の心礎しんそ（塔の心柱を支える礎石）の中には馬具や玉類など古墳に副葬されるのと同じ宝物が埋納されていました。古墳時代と飛鳥・藤原京の過渡期の地鎮祭の特徴を示しています。

奈良時代、平城京に都を遷しますが、藤原氏の氏寺である興福



古墳時代の地鎮（森垣外遺跡）

寺の中金堂では金銅製の大きな皿や鏡、金の延板など豪華な鎮壇具ちんだんぐが納められていました。

次に、長岡京期の事例として、東三坊大路与二条条間北小路の交差点から木の箱に

銭貨^{せんか}を埋納した遺構が検出されています。道路敷設に関する地鎮祭と考えられます。

また、右京五条二坊一町の建物に付随する土坑からは、据えられた状態の須恵器の壺と神功開寶^{じんぐうかいほう}（初鑄 756 年）



長岡京跡の地鎮祭

（東三坊大路と二条条間北小路の交差点）

1 枚が埋納されていま

した。左京七条二坊七町の建物跡の柱穴から四仙騎獸八稜鏡^{しせんきじゅうはちりょうきょう}が 1 点出土しています。これらは、建物を対象にした地鎮祭と考えられます。

銭貨の初例には無文銭、「富本銭^{ふほんせん}」がありますが、これらの銭貨は通貨としてよりも、護符^{ごふ}としての用途があったようです。

長岡京などの建物で見られるように、銭貨を地鎮具に使用することに現在では違和感があるかもしれませんが、平安京跡の調査でも建物の柱穴から土器とともに銭貨が出土する例がよく見つかっています。

長岡京期以後の平安時代や中近世においても、埋納遺物の種類と員数、埋納遺構の形状、建物に対する地鎮遺構の位置関係など、統一的ではない地鎮祭が、各地で執り行われています。

それは、地鎮祭が密教や神道、民間信仰ごとに異なった作法で行われたためでしょう。

地鎮祭が古墳時代中期には成立し、それ以後、日常生活に溶け込んだため、地鎮祭を統一することができなかつたためではないでしょうか。

（小池 寛）